

● ランチョンセミナーレポート

歴史からみた心身症の漢方治療

さる2月25日(土)、第41回日本心身医学会近畿地方会(第25回近畿地区講習会)が大阪国際交流センターにて開催された。当日のランチョンセミナーでは医史学研究の第一人者である日本TCM研究所 所長 安井廣迪 先生の「歴史からみた心身症」と題した講演が行われた。そこで、講演内容についてレポートする。

われわれは歴史から多くを学んでいる。先人の英知は時代を経てもなお、われわれに新たな発見を示唆し続けているが、漢方医学と例外ではない。わが国の医学は、江戸時代末期までは漢方が中心であり、それを基軸とした医療が実践されてきた。

講演では、先人たちの治療記録を繙き、現代医学的に心身症や精神疾患と認められる13症例(表1)の診断・治療について述べられた。その一部について紹介する。

◆曲直瀬 玄朔、淀君の気鬱を治す

玄朔には多数の著書があるが、中でも30年以上にわたる診療記録を著した「医学天正記」や「延寿配剤記」には、ときの帝から庶民に至るまで数百例の詳細な診療記録が残されている。

十一朔 内大臣秀頼公の御母。三十余歳。気鬱、胸中痞塞して痛み、全く食すること能わず。時に頭痛す。氣を順らするの湯。回春・痞満門の養胃湯二十余日の後、右剤を以て丸と為し、久しう之を用いて効有り。

症 例：32歳 女性(淀君)

初 診：慶長3年(1598)11月1日

主 訴：気鬱

現病歴：さる8月18日に秀吉公が薨去し、胸中が痞塞して痛み、全く食することが出来なくなり、時に頭痛もある。

診 断：気鬱(反応性鬱病)

治 療：養胃湯(表2)

20日余り服用ののち、これを丸薬に製して長服。

(出典：曲直瀬 玄朔「延寿配剤記」氣門)

秀吉が薨去したとき息子秀頼は6歳であった。気丈な女性として知られる淀君でも心理的重圧は相当なものであったと想像がつく。病前性格は健全であったと思われるところから秀吉の死というエピソードから反応性鬱病を発症したものと推測される。

漢方的解釈をすれば、身内の死に伴う精神的ストレスにより肝鬱を来たし、横逆して脾胃を障害し、心下の気機の昇降が失調して気鬱を発症したと考えられる。「食すること能わず」とは、胃の通降機能の失調であり、胸中痞塞するのは痰湿の滞留によるもので、治療方針は肝鬱を除き、胸中の痰湿を去り、心下の気機の昇降を回復させるところにある。

表1 現代医学的に心身症や精神疾患と認められる13症例

半井 慶友	比々屋の息子の気煩を治す
曲直瀬 玄朔	淀君の気鬱を治す
北山 友松子	女性の狂疾を治す
後藤 良山	ある男の狂を治す
吉益 東洞	ある苦学生の独語妄笑を治す
永富 独嘯庵	苦学生の独語妄笑を治す
永富 独嘯庵	新婚男性の気火鬱蒸を治す
和田 東郭	大阪・住吉屋の若後家の頭眩を治す
中神 琴溪	越中の善次郎の神心恍惚を治す
原 南陽	疫の後に発した不寐煩躁を治す
尾台 榮堂	一婦人の狂を治す
山田 業広	駒込の杉本某の狐祟(狐つき)を治す
浅田 宗伯	横浜本町肥前屋の僕・万吉の鬱証を治す

表2 養胃湯(「万病回春」痞満門)の方意

- ・香附子・枳実は疏肝理気に働き、肝鬱に対応する。
- ・白朮・陳皮・厚朴・大棗・生姜・甘草は平胃散の意で胃の湿を除く。
- ・半夏・陳皮・茯苓は二陳湯の意で、胸中の痰飲を除去する。
- ・白豆蔻・砂仁は芳香化湿に働いて消化を助ける。
- ・全体として胸・心下・胃における気機の昇降を回復させる構成となっている。